「比較文体論」紹介にあたって

（完）

円　尾　　健

「比較文体論」なるものに関心を持ち，単に紹介するだけにとどまらず，それがはらむ——特にわが日本において——問題を，関心のおもむくままに論ずるようになってからかなりの年月がたった。

すでに述べたように，最初は英仏の比較，独仏の比較といった，知的な，あるいは研究上の関心から出発したわけであるが，そのうちにふつうの仏文学研究のわくを超えて文化一般の問題に論及したのも，「比較文体論」が，実は「比較文化論」に他ならない以上，そういった基本的な問題に関する日本人としての自己認識（たとえば西欧と日本といった）と切り離して考えられなくなり，いわば自己の座標軸を探ることなくして，いわゆる専門研究なるものに専念する気にはとうていなれなかったからである。だが，いうまでもなく，問題は二三の論文で尽くすにはあまりにも大きく，のびのびになっている「仏独比較文体論」の紹介を「文学論集」で行うこととして，この辺で一まず議論を整理，総括することにする。

1

たまたま，昨年の夏はドイツを中心とした二度目の訪欧をする機会にめぐまれた。夏休みを利用しただけの小旅行にすぎなかったが，最初の時とは違った，さまざまな感想が浮かんだことも事実である。

この前の時はほんの二三回，行きずり程度でドイツについては印象が稀薄であったが，こんどは短期間ながらミュンヘンの身内の家に滞在することができたおかげもあって，日本同様，第二次世界大戦の敗戦国として出発し，奇跡的な復興をとげて経済大国となったこの国について，いろいろと観察することができたのであった。そして，同じように敗戦から立ち直

ったといっても，復興の，ドイツとの質的な違いは，行きずりの旅行者にも十分見てとれたような気がする。

明治のはじめ，自由民権運動の斗士，中江兆民が日本の目標として掲げたのが，「東洋中に一個，厳然たるヨーロッパ的の島を現出すること」であった。このように，日本はヨーロッパをモデルとして西洋化，あるいは近代化に努力し，兆民の目標は現在，外形的にはおよそ到達できたといえる状況になっている。けれども西洋をモデルとする考え方はそこで止まらず，まだまだ強い勢いで存続しているというのが桑原武夫先生の，今日の日本にたいする診断であり，それは正しいと思うが，二回のヨーロッパ訪問，とくにこんどの旅行を通じて筆者はヨーロッパの文化の蓄積や厚みを実感し，それにくらべると，外形的には西洋化に成功したとはいえ，日本はいぜんとして「ひよわな花」であり，全体として見た場合，あらゆる面で目先の必要をみたすのに追われてきたというのが実情ではなかったかと考えずにはいられなかった。

ところで，今回の訪欧で，長時間の飛行機旅行に疲れてウンザリしながら今さらのように痛感したのは，ヨーロッパは遠いということであった。分り切ったことのようであるが，フランスは，ヨーロッパは地球の裏側(！)にある。そしてその距離を物ともせずに，ヨーロッパをめざす日本人の旺盛な好奇心とエネルギーには，同胞ながらホトホト感じさせられたのであった。

ただ，単なる観光旅行ならともかく，かりにもヨーロッパを研究対象とするということになってくると，物理的な距離からくる困難に加えて歴史的，文化的な基盤の違いも大きく，本来カネと時間と相当な準備を必要とする，容易ならざる仕事と思われる。だれにでもできる仕事ではないし，まただれもがやる必要もないのだ。そういった感想にふけりながら，戦後の滔々たる欧米の傾斜の中で，日本中に雨後のタケノコのごとく発生した，英文科にはじまる外国文学ないし外国語科のことなどを考え，そこに見られる日本人の呆れるばかりのノンキさというか，楽天性，またそれを支え

るよくも悪しくも特異な文化意識——ことに外来文化にたいする——について考えずにはいられなかった。

これまで比較文化論の立場から，近代日本のおかれた特殊な状況と外国文化とのかかわりについて，ユニヴァーサルな論理で論じてきたが，いささか性急にすぎたのではないかと反省している。たしかに，ユニヴァーサルな論理で物事を判断するのも作業の不可欠な一面ではあろうが，同時に物事に内在する論理にも留意するのでなければ表面をなでるだけの一面的な見方に終始しかねない。近代日本のおかれた状況が特殊であるとするならば，それを考察するには，それに見合う特殊な目が必要になってくるだろう。そこで，今回は，上に触れた日本人の特異な文化意識に即して問題を考えて行くことにする。（この意識についても，最初は否定的に，マイナスの方向でしか考えられなかったのだが，最近，梅棹忠夫教授の所説などによって別の見方があることを教えられたのである)。

2

日本の近代というのは疑いもなく特殊なものであったが，それをもう一度，桑原先生の『ヨーロッパ文明と日本』(朝日選書)や，梅棹教授の『地球時代の日本人』（講演集，中央公論）にしたがって，かんたんに見て行くことにしよう。

日本は数千年にわたって，三つのおだやかな環境の島に同一民族が同一言語を使い，自分の文化を形成して暮らしてきた。その間，外からの侵略を受けることもなく，異なった文化と激突した経験したこともないというまことにめぐまれた歴史を持っている。梅棹教授は，価値の体系としての——相互不信の体系とさえいえるほどの——文化の酷薄無残な側面を指摘し，ユダヤ人の例などをあげながら，日本民族が「世界でもめずらしい，ウブな民族」であるといい，日本の文化を「温室そだち」で，「過保護の文化」と呼んでいる。そういった世界性を欠いていた，閉鎖的な民族が外圧により開国を迫られ，急に封鎖を解いて世界史の中に身を投じたというのが，日本の近代の始まりなのだ。

同時に，明治の日本とは，国家による徹底的で急激な西洋化の計画であったが，そうしたことが可能で，また早く成功したのは，単に強国になるという政治的要請のためだけではなく，「西洋への憧れが日本人の心の底深くにあって，それが常に刺激してきたから」であり，「その憧れの激しさは，今日もまだ衰えずにつづいています。それは最初のうちはむしろ国民の上層部と知識人のあいだに顕著だったのですが，日本の近代化と経済成長につれて，それはしだいに大衆化したのであります」（桑原武夫）ということも決して忘れてはならない事実であろう。

ところで，1868年に日本が近代主義革命に成功して以来，約一世紀の間に，たしかにおびただしい制度や，思想や，技術を西洋から取り入れて，東洋での西洋化に成功した。日本は西洋化による近代化の先頭をきってはしる優等生である。というのが多くの外国人たちの最大公約数的な日本観であり，また同時に多くの日本人のそれでもある。梅棹教授はそういった見方に疑問を投げかけていう。第一に，日本は西洋化したことによって近代化したのではない。日本の近代化は明治の革命よりずっと以前から進行していたのであって，だからこそそれ以後の西洋化をスムースに行うことができたものと考えられる。つまり，西洋化は日本の近代化の原因ではなくて，むしろ結果であるということになる。次に日本は，本当ははそれほど西洋化していない。かんたんに西洋化といったことをいうが，それは見かけだけで，日本文明の本質的な部分は，じつは殆んど変っていない。いずれにしろ，日本の西洋化ということだけを気にしていると日本は西洋文明の一つの亜流であり，西洋風近代化路線の優等生ということで終ってしまう。これでは日本を理解したことにならない。

教授によれば，日本の文明は，西洋文明と一見よく似ているが，これはまったく異質のものである。近代におけるはげしい文化交流の結果，現象的には類似するものが多いが，その背後の原理，精神は，西洋のそれとはまったくべつのものである。日本の文明はヨーロッパ文明の亜流ではない。ヨーロッパから遠く離れた極東の一角において，形態的には似た点を多く

持ちながら，その精神はたいへん違っている，別種の文明が平行して進化をとげてきたのである。

われわれは，ともすれば，滔々たる西洋化の流れの中で現象面に目をうばわれ，日本を西洋化の代表選手のように思い込みやすいが，この教授の意見は，その点きわめて重要な指摘であると思われる。

教授はさらに，日本文化における基本的なあり方として，「多元的要素の重層的な共存」をあげる。精神生活においても，日常の衣食住においても，一見たいへん西洋化しているかに見えるが，よく見ればべつに日本風を棄てさったわけでも何でもない。日本文明の西洋化というのは，そういう意味である。「つまり，日本人の精神の多重構造の表面に西洋ふうのものが一枚くわわった，というにすぎないのであります」（傍線筆者）。これは，平たくいえば，いろんな要素が雑多に，別に矛盾もせずに平和に共存しているということであろう。そして，それが――好むと好まざるにかかわらず――日本の文化の基本的性格なのだ。その点を見誤まるところに（日本人でさえ），さまざまな誤解が生ずるのであろう。

たとえば，『日本人と近代科学』（岩波新書，昭和51年）で，著者（渡辺正雄）は，序章において次のように述べている。

> この百年間に日本人は，日本在来のものに代えて舶来の学芸と文物を習得することにその主力を傾けてきた。あるいは西洋一辺倒となり，または和魂洋才を唱えて日本の伝統の一部を保持することを試みたりした。時によって西洋と日本の間に振り子が揺れ動くことはあったが，全体的にみれば，皮想的な和洋折衷が出現する結果になっている面が多いようである。日常の衣食住から，国の政治，経済，産業，教育，学術にいたるまで，そのことは一見して明かである。和洋両方の要素が共存してはいるものの，外来のものは必ずしも十分に定着したとは言えない。一方，在来のものの真価は忘れかけられており，時に外国人の指摘によってその意義を再認識するという有様である。

われわれは，もはやこうした事態から脱却すべきである。〔…〕（傍線筆者）

これは，現代日本の知識人の，現代日本文化にたいする平均的な意見と考えてもよいのではないかと思うが，それにしても「皮相的な和洋折衷」とはどういうことであろうか。いうまでもなく，「多元的要素の重層的共存」ということが常に美徳であるとは限らず，分野によっては否定さるべきこともあるだろう。だが統一的な世界観や形式論理，また西欧文明の観点になれた目からはいかに不徹底であいまいであろうと，その一見，皮相的な和洋折衷が，実は日本人の真の生き方であるとすれば，それを皮相的と呼ぶこと自体，すでに皮相的ということになってくるのではないか。ここで，もう少し梅棹教授に従って，「西洋文明の亜流ではなく，それとはまったく異質な」日本文化を支える日本人の心性なるものに目を向けてみよう。

3

『人の心と物の世界』という講演で，教授は日本文明をささえる精神的構造が，いかに西洋的なものと違っているかということの一例としてアニミズム的汎神論（自動車のおはらい，近代的なビルの神まつりの儀式，おまもり，入学試験の願かけ）が現代の日本に脈々と生きていることをあげているが，その中で「漂流の美学」と題し，日本人の目的の評価という問題について，きわめて興味深い考察をおこなっている。

日本人は一般的にいって，ひじょうに実際的な国民であります。おかれている状況を正確に把握して，その対応策を的確にうちだしてゆく。そしてたいへん経験主義的であって，判断の基礎はいつも過去の経験にもとめて行く。その反面，論理だけで巨大な構築物をつくりあげてゆくというようなことにはよわい。そういう性質があります。それだけに，一つの確固たる目的をさだめて，それにむかって着々とすすんでゆくと

いうようなことは，あまり得意ではないようであります。どちらかといえば，その場しのぎの対策はわりにうまくやるけれども，長期にわたる目的合理性と計画性という点では，あまりすぐれた国民とはいいがたいように思います。

じっさい，日本の歴史をながめてみましても，一つの目的を追求して，着々と努力をつみかさねてきた，などはとうていいいがたい。いつでもいわば弥縫策——つまり，やぶれたところをあわててぬいつくろって間にあわせる——その連続なんです。ほとんど原理らしいものをもたずに現実主義と経験主義にたすけられて，いつもなんとか難局をきりぬけてきた，そういう国民であります。あの，明治の革命のときも，明確な目標は何もないし，いったいどうなるのか，だれにもわかっていない。しかも，なんとか難局をきりぬけてしまった。日本の歴史をみますと，ここで一歩あやまったら今ごろどうなっていたかわからん，というようなことの連続ですが，それをいつも，無原則なビホウ策でのりきっている。

このような傾向は，日本国家・日本民族の歴史のなかにみられるだけではなく，一人一人の人間のいき方の中にも見られる。人生に対する態度がいちぢるしく無目的的で，何のためにいきているか，あまりはっきりさせない，あるいはさせたがらない，というところがある。その場そのときで，適当に処理してゆくけれど，全体として確固たる目的，計画性，原理があるわけではない。「確固たる目的」と，それにむかってすすむ「決然たる意志」，これは世界一般にひろく価値をみとめられた人生の生き方であるけれども，日本文化においては，あくことなき目的の追求はかならずしもよい評価を受けず，むしろ反対に，いやしいこと，よからぬこととして否定されることがおおいのである。

このように日本人の行動の様式を規定して，教授はそれを「行進の美学」——確固たる目的と決然たる意志にもとずく——に対比させて「漂流の美学」と呼ぶのだが，それはともかくとして，このような，よくも悪しくも

「なしくずし」と「成り行きまかせ」を基調とした日本人の心性の描写に，多少とも自分の自画像を感じない日本人はおそらく存在しないであろう。

桑原先生は日本のナショナリズムを論じ，近代日本人が容易に転向するという事実に触れて次のようにいう。「単一民族による封鎖安定社会を永らく形成してきた日本社会には，論理学，レトリックが発達せず，抽象的，原理的思考を生み出すには適していませんでした。原理にたいする尊敬のないところで，一つの立場にあくまで固執するという態度は生まれにくいのであります。そこにおいていちばん基本的な思想，むしろ感情というべきものは，生きることの大切さということでありましょう。地上には，けだもの，鳥も，虫も，みなそれぞれの生き方で生きている。人間は状況に適応して生きていくべきだという自然な考え方が基本にあって，これを規制すべき抽象的理念がない，あるいは弱いときは，適応性を本質とする自然的生命主義が主流となるのはむしろ当然のことでありました」。（明治革命と日本の近代」）。こういった見解も，同じことを別のことばで述べたものであろう，

以上，かなりのスペースを割いて，両学者の所説を中心に日本文化の特殊性を探ってきたが，そこに現われた傾向が，ヨーロッパ文化の特性——近代合理主義，個人主義，物事における徹底性など——に大きく相違することはだれの目にも明かであろう。

4

二年ほど前，甲南大学に非常勤講師を頼まれて通っていた時，若いドイツ人が講師として来ていて，たまたま話を交わす機会があった。社会学と建築を勉強しているとのことであったが，話が日本のことに及んだ時，かれは日本の社会のことを durcheinander であるといった。急には分からなかったので聞き返すと unkontrolliert のことだと答えた。かれは日本の社会のことをノー・コントロール，つまりすべてが野放しだと批評したのである。当方とて，たとえば，日夜，電車の窓から郊外の町づくりなどがいかなるものであるか見ている関係上，そういった事実に無智であったわ

けではないが，あらためて外国人の口から聞かされてショックを受けたのであった。長年，日本に駐在するドイツの特派員も現代日本について同じような批評を下している[1]が，筆者自身ドイツにしばらく滞在したおかげで，その意味がよく納得できたのである。ドイツ人だけでなく，一般にヨーロッパ人の目に欠陥とも，奇怪ともうつるこういった日本的性格——なしくずしと行き当りばつたり——は，すでに触れたように，よくも悪しくも日本人の基本的な行動様式なのであって，都市問題だけでなく，その他，政治，目下超過熱化している教育問題など現代日本のあらゆる問題に共通して見られるが，ここでは比較文体論に直接関係のある，日本語をその観点から取り上げて考察することとする。

この前の論文で，筆者は学生時代にフランス式論文 (dissertation) の指導をうけた経験から，西洋人，とくにフランス人の言語にたいする姿勢が「方法的」，あるいは「意識的」だとすれば，日本人のそれは「自然発生的」とでもいえるのではないかと述べ，あわせて鈴木孝夫教授（言語学）の説——日本人のことばにたいする考え方は，西洋人のそれにくらべて「自然的言語観」であるとする——を紹介したが，これも，さきに検討した日本文化の特性の一環として把えはじめてその意味がはっきりするのである。

前の論文でも指摘したように，日本の大学には，入試に国語より英語の配点が高かったり，あるいは英語を課しても国語の試験を全然課さない大学がある。本学でも工学部の入試には国語の試験はなく，それを知った時，筆者は文字通り耳を疑ったのであった。およそ近代国家で，自国語より他国語を尊重するなどというバカなことがありうるか，とまあこう考えたわけだが，週刊誌などで見る大学入試情報によると，理科系では，外国語のテストはあっても，国語のテストなぞないのがふつうであり，あらためてあきれ返るやら，本学だけではないと知って安心したりしたのである。(？)

その上，入学のあかつきには，あたらしく第二外国語の勉強までやること

1) G. ヒールシャー，インタービュー「不思議な国，日本」「PHP」 昭和51年12月号

とになっている。いったい，自国語の訓練なくして外国語の勉強が可能なのかという本質的な疑問はこの際おくとしても，自国語というものが日本人にとって何か水か空気のように自然に存在するものであって，とくに訓練したりする必要なんか，だれも考えないということをこれほどはっきりと物語る事実はないだろう。（日本では，国語といえばやたらに文学偏重であり，文学以外の表現にあまり考慮が払われていない，つまりスタンダードな散文が必ずしも確立されていない，そのため国語といえば文学部の国文科にまかせておけばよいといった傾向があることも事実だが）。

梅棹教授は，今日の日本の，文化的鎖国状態をもたらした一つの大きな要因として言葉の問題を取りあげ，日本語の持つ問題を論じているが，しばらくその発言に耳を傾けてみよう。

日本語という言語は，国際的な文化交流のための道具としては，たいへんやっかいな性質のものだとわたしはかんがえています。ふつうの意味で，外国人におしえられるような形にはなっていない，ということです。

まず，その表記法は，ご承知のとおり，複雑怪奇，かつデタラメであります。正書法さえも確立していない。かなりの時間をかけておしえても，外国人が日本語の文献を自由によみこなすということも特別の場合をのぞいてあまり期待できない。また，標準語さえも，確立しているとはいいがたい状態であります。文法までが，いまなおゆらいでいる部分がひじょうに多い。日本語というのは，そういう言語であります。日本語というのは近代文明語としては，完成にほどとおい，ある意味ではまことに整理不十分な言語であります。それを外国人におしえようというのですから，困難をきわめるのも当然であります。

日本語が今日こういう状態になっているということは，やり日本文明の国際的孤立ないしは半憧国だとおもいます。言語というものは，異文化と接触すればするほど，すりきれてドライなものになり，その一面，

外国人にも理解可能なものになってゆくものですが，日本語はそういう国際的接触の経験をほとんどもっていない。内部の人間から見れば，まことにニュアンスにとんだ，情感ゆたかな言語ではありますが，外部からみれば，おそろしく理解の困難な言語であります。日本語もまた，もっぱら受信用として発達した言語であって送信用の信号の体系としては，上等のとはいえないでしょう。もし，この言語を外国人におしえ，それによって国際的文化交流に役だたせようとするならば，まず，日本語そのものの改造をやらなければなりますまい。

〔…〕　　（「国際交流と日本文明」）

『スタンダード和仏辞典』の編さんにたずさわり，その後フランスで日本語を教える羽目になったという，一フランス語教師が，日本語の辞典の不備にたいして感じた不満を述べている文章がある[2]が，それはまさしく梅棹教授の所説を裏書きするものといえよう。そして，「しかしながら，問題はそこにあるのではなく，われわれ日本人が言葉の吟味を必要としない生活を送っていることに求めるべきではないか，と，近頃はとくにそう思うようになった。実体と言葉が乖離した形で生きうる，事物の認識を言語化せずとも大抵の場合ことが済む，正確な言葉で表現しなくとも，おおよそ相互の意向を察知しうる，あるいは察知しなければならぬ＜共生状態＞にあることに。」と，その教師がつけ加えているのも示唆的ではないか。

さらに，ある学会でフランス人の講師が反訳について研究発表したさい，《Le français est la seule langue gai est assez précise pour rendre les impécisions dy japonais》という感想をもらしたのが非常に印象に残っていることを最後につけ加えておきたい。

5

以上，西欧文明とは異質の，独自の性格を持つ日本文化，そしてそれの

2) 新倉俊一『フランスの辞書素描』「言語生活」特集・フランス語に学ぶ，1974年6月号

反映としての日本語の特性を探ってきたが，こんどはできるだけ速断や，一方的な裁断を避けて，基本的な問題を浮かびあがらせるように努力したつもりである。一つの制度を，ある特定の尺度ではかって，すすんでいるとかおくれているとかを論じてもあまり意味はないと梅棹教授はいうが，それは文化一般についても同じことであろう。

あるアメリカ学者は，トクヴィルなどのアメリカ研究を例に引いて，アメリカ研究は要するに「比較研究に他ならない」ことを指摘して，「日本のアメリカ研究者はもっと日本自体を知らなければならない」と述べている。それはすでに，すぐれたイギリスの日本研究家G・B・サンソムが，西洋人の研究者に研究対象国——日本——の学界でできた専門という枠に自己限定するよりは熟知している自国の文化に立脚し，用いるよう薦めた比較の方法であった。

> 日本史をそれ自体を目的としてではなく，すなわち孤立的に生起する諸事件の単なる記録としてではなしに，世界史の有機的なかつ重要な一部として研究すべきである。
>
> （『世界史における日本』岩波新書）

ところが，その点，多くの日本のインテリ，そして研究者はきわめて厄介な立場におかれてきたといっていいだろう。飯沼二郎教授は日本の近代農法について論じ，日本の農学者のメンタリティに触れて次のようにいう。

> 日本のインテリは，七世紀に，当時の「先進国」中国の律令制をまねて日本の律令制をつくって以来，つねに「先進国」（明治までは中国，明治以後は西洋，敗戦後はとくにアメリカ合衆国）の文化をみずからの手で日本に導入し，それを手段として，日本の人民を〝指導〟してきた。だから，日本の〝指導〟者の資格は，つねに，その時々の「先進国」の文化をどれだけ知っているかという知識量によって決定され，そのさい，

日本の在来の文化についての知識量は，ほとんど問題とされなかった。それは，せいぜい〝指導〟者の趣味ないしは知的アクセサリーにすぎなかった。このような日本のインテリにとって，逆に人民に学ぶなどということは，ほとんど，その意識にのぼるはずもなかった。

（「講座・比較文化」第五巻，『日本人の技術』，第一部・第一章『農産物』）

つまり，自国を熟知しているどころか，ロクに知らないのである。これでは立脚しようにも足がかり一つないではないか。ちょうど『英仏比較論』を読んで，「フランス語を読むことぐらいはできると思っていたが，そんな気がしていただけではなかったか」という深刻な疑問におそわれ，日本の外国語，および外国文学なるものに雲のような疑いが広がりかけていたときであった。ふつうの仏文学研究のわくを超え，言語一般，文化一般，日本と西洋との関係を性急に論じていったのもそういういった背景のうえであった。

その結果，なにほどのことができたか分らないが，少くとも方向としては間違っていなかったし，いささか自己認識にも役立ったと思っている。

近代日本の歴史は，平川祐弘教授（比較文化）のいう通り，「西洋文明の衝撃の下で，東アジアの一文明が示した対応の記録」であり，西洋とは異なって「外から強制された，外発的な歴史の展開」という特殊性を持っている。だがそれにもかかわらず主張するに足る独自の性格を失っていず，そのことを見逃しては日本の理解―― ひいては西洋の理解もあり得ないということをこの小論では扱ったつもりである。

そういった観点からは，当然，研究においても日本的方法といったものが問題になってき，そして事実，あちこちでその必要が感じられているようであるが，今年の仏文学会で桑原先生が，専門細分化に対して一般論の必要を説くと同時に，フランス文学研究を単にフランス人の模倣でなしに，客観化，対象化して日本的アプローチを創出する必要を示唆されたことを

想起する。だが，これは今の筆者にはあまりにも大きすぎる問題であり，後日，機会と準備があれば触れることにして，比較文体論に関連した考察を一まず終えることにする。

（本学助教授）